R1.7.27（土）柴崎遺跡現場事務所前
午後1時00分～3時00分

柴崎遺跡現地説明会資料

１.調査の概要

遺跡名：柴崎遺跡（しばざきいせき）　　所在地：横手市赤坂字柴崎地内
調査期間：令和元年5月15日～8月9日　　調査面積：約4,000㎡（工事立会箇所含む）
遺跡の時代及び性格：縄文・弥生時代：散布地
古代（平安）・中世（鎌倉）・近世（江戸）：集落跡
近現代（明治～昭和）：水田跡
調査原因：横手赤坂柴崎地区農地集積加速化基盤整備事業に伴う発掘調査
事業主体：秋田県平鹿地域振興局農村整備課
事業関係機関：旭川水系土地改良区・株式会社伊藤組造園
調査指導：秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室
調査機関：横手市教育委員会教育総務部文化財保護課

２.遺跡の概要

横手駅から西北西に約1.8kmの位置にあり、現況は水田となっています。調査区の南西側を頭無川が北東側は用水路が北流しています。周囲を見渡すと遺跡の立地場所は北西南東方向に向かい馬の背状に高く、東側と西側は低くなっています。南側と東側には神社が一段高い位置で残っており、これが本来の高さと想定されます。約200年前に書かれた菅江真澄著『雪の出羽路』では、2軒の家があったことが記されています。

遺跡は、『秋田県遺跡地区（平鹿版）』では平安時代として周知されていました。条里制遺構の範囲内であり、多くの遺跡が点在します。遺跡から北西約1kmの位置する赤川沼頭遺跡では、平成28年に発掘調査が行われ、9世紀前葉～中葉の、水辺の近くに立地した掘立柱建物と廃棄土坑からなる集落跡であり、柴崎遺跡も類似性が考えられました。西の中山丘陵は、奈良時代から平安時代にかけて須恵器と土師器が生産され、秋田城や払田柵にも供給していた、東北でも代表的な古代の窯跡群です。

３.調査の結果（7月26日現在）

◎平安時代

検出遺構：掘立柱建物跡8棟以上（柱穴1,100基検出）・土坑10基以上・井戸跡8基以上・区画溝3条・溝跡10条以上・暗渠6条・水田跡5枚の約1,200遺構

出土遺物：縄文・弥生時代⇒土器・石器
古代（平安時代）⇒須恵器（すえき）（蓋・高台坏・坏・長頸壺・短頸壺・広口壺・甕）・転用硯・溶壁
土師器（はじき）（ロクロ成形の坏・平底小甕（かめ）・長胴甕・鍋と手づくねの坏・長胴甕）・木製品（曲物）・土製品（紡錘車）・瑪瑙
中世（鎌倉時代）⇒須恵器系陶器片口鉢
近世（江戸時代）⇒寛永通宝・国産陶磁器（肥前・唐津など）　　小コンテナで40～50箱

４．みどころ（遺構配置図参照）

●みどころ１（遺跡全体を見渡す）⇒遺跡西側には水田の表土が盛土されており、ここに登れば、遺跡の立地が良くわかります。調査区北側と西側はすでに一段低くなっており、昭和30年代の耕地整理により、遺構が消滅したと思われます。調査区内は多くの溝跡が折り重なるように確認できます。

東西南北の軸線を意識したとみられるピンクの溝跡あり、何回か軸線をずらして造り直しをしているようで

す。溝跡は東側（現存34m）と南側（同60m）だけが確認できます。北西側は不明ですが、方形に区画されていたのではないかと思われます。方形区画の中には、場を分ける区画溝が数条確認できます。

地形に合わせて構築したとみられる緑の溝跡は、旧地形の高い場所の端に構築したとみられます。131 溝跡からは古代の土器が多く出ましたが、1 点鎌倉時代の片口鉢が出土していることから中世に構築された可能性があります。131 溝跡南側の 132 溝跡及びさらに南側の太い 42 溝跡からは近現代の遺物が出土しています。太い 42 溝跡の南側では 6 枚の水田跡と畔跡が確認されました。水田跡は 8～10m四方の面積でした。一部の水田跡は不整形であるから一度作り直しをしているのかもしれません。

青色の暗渠は南北方向に等間隔で配置されるも緑の 131 溝跡の前で途切れることから、その地割が古代・中世から受け継がれていた可能性があります。茶色の暗渠は昨年まで使用されてた田んぼの軸線と並行して作れているものです。

●みどころ 2（遺跡東側に広がるおびただしい柱穴）⇒調査区東側では多数の柱穴が確認されました。この柱穴が規則的に並ぶことによって建物が復元できます。現時点では 8 棟の建物しか復元していませんが、柱穴が 1,100 基あることから、相当数の建物が各時代とともに建て替えられていったのでしょう。精査中と書かれた場所は、現在も作業を行っている場所であり、柱穴が最も集中している場所です。平安時代の柱穴は、柱掘り方が大きく、柱筋が整然としていますが（4 号建物以外）、中世以降になると、柱掘り方が小さくなり、柱筋も歪む傾向があります（4 号建物）。現在精査中であるため、わかりやすい建物のみ図上復元しましたが、今後の整理作業で柱穴を全て使用できるよう検討を行っていきます。

●みどころ 3（区画と建物の配置）⇒方形区画であるピングの溝跡と並立していると思われるのが、中心建物（規模の大きい 1 棟もしくは 2 棟の建物が存在）・6 号建物・3 号建物です。区画の中央部分には柱穴が少なく広場のような場所と思われます。古代役所の政庁などでみられる「コ」の字配置なのか今後の検討課題です。

●みどころ 4（並立する掘立柱建物跡と総柱建物跡）⇒遺跡西側では、長軸 50～60 ㎝の大きい柱掘り方が 11 基南北に並んで検出されました。このため盛土を剥ぎ取り、その建物の規模を確認したところ、2 棟の大型建物跡であることが確認されました。1 号建物は方 2 間で柱間が 2.55m（8.5 尺）で面積 27 ㎡、2 号建物は方 3 間で柱間が 2.1m（7 尺）で面積 40 ㎡と規模の大きいものです。両建物も建て替えが行われています。同時存在したかは今後の検証が必要ですが、もしそうであるなら東向きの建物で 2 号建物はお堂であったかもしれません。一部の柱穴抜き取り痕には甕胴部破片が充填されていたことから、建物の廃棄行為が行われていた可能性があります。

総柱建物跡は、他の建物が側に柱が並ぶのに対し、5・7 号建物は柱筋全てに柱があり、これは重量に耐えるための構造です。この構造から正倉（米蔵）と考えられていることから、米の管理を行うことのできる集落です。

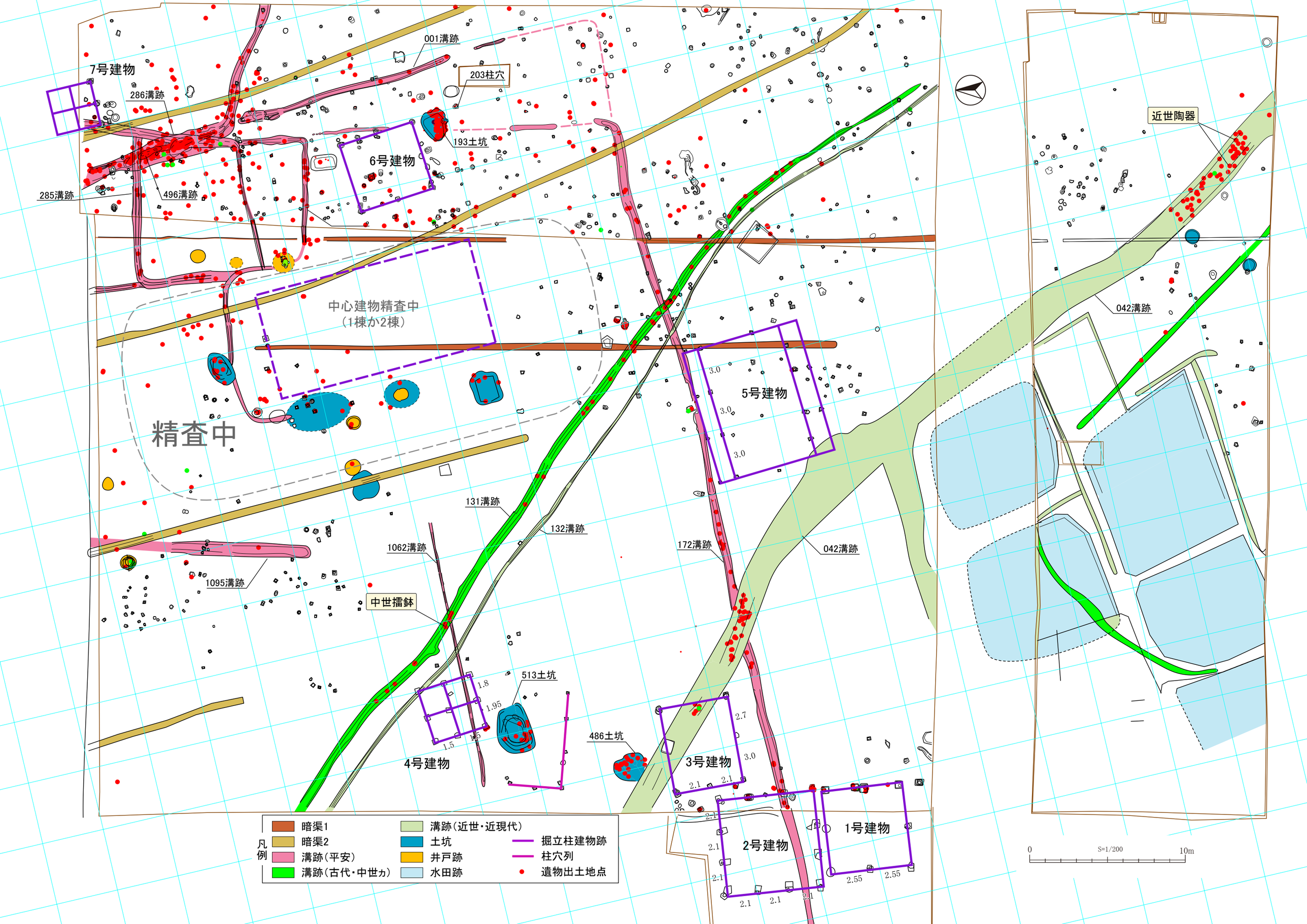
●みどころ 5（至近距離にある多数の井戸跡）⇒遺跡北東側では 8 基の井戸跡が確認され、いずれも埋められていました。遺跡両際には河川が流れていることから水には困らないはずであることから、井戸を作ることに意味があったようです。井戸跡の平面形は円形で、直径は 1m前後で、人 1 人が作業できる大きさは確保していたようです。井戸の掘り方を作り、その中に井戸枠が設置されていたようです。深さは 1.5mから 2m前後で各時代によって湧水地点に差があったことも考えられます。焼けた石や曲物などが出土しました。

●みどころ 6（土器捨て場である土坑と堆積した火山灰）⇒方形区画内には土坑が点在し、割られた土器が多く出土したことから、廃棄穴であったとみられます。513 土坑では上層で火山灰がレンズ状に堆積していました。これは十和田湖の噴火によって降灰した日本史上過去最大の噴火であり、915～934 年の年代が検討されています。いずれにせよ土器はそれより下からの出土です。

５．最後に

柴崎遺跡は、縄文・弥生・古代・中世・近世・近現代の複合遺跡で、主要な時期は、古代の平安時代前期（9 世紀）です。平安時代前期の横手盆地では、払田柵が創建され、中山丘陵においても須恵器生産が最も行われており、律令国家の支配が平鹿郡域では浸透している時期と見られます。

柴崎遺跡の集落の建物は、竪穴建物跡が確認されず、全て掘立柱建物跡であり、また区画溝内に中心建物・付属建物・総柱建物などが整然と配置されています。また出土遺物からみると、須恵器の蓋・高台坏や壺類が比較的多いことや転用硯の存在などから、「官」とのつながりが深い集落と考えられます。


7号建物
286溝跡
285溝跡
496溝跡
001溝跡
203柱穴
193土坑
6号建物
中心建物精査中
（1棟か2棟）
精査中
5号建物
3.0
3.0
3.0
131溝跡
132溝跡
1062溝跡
1095溝跡
中世擂鉢
172溝跡
042溝跡
513土坑
486土坑
4号建物
1.8
1.95
1.5
1.5
3号建物
2.7
3.0
2.1
2.1
2.1
2号建物
2.1
2.1
2.1
2.1
2.1
1号建物
2.55
2.55
近世陶器
042溝跡
0
S=1/200
10m
凡例
暗渠1
暗渠2
溝跡（平安）
溝跡（古代・中世ヵ）
溝跡（近世・近現代）
土坑
井戸跡
水田跡
掘立柱建物跡
柱穴列
遺物出土地点